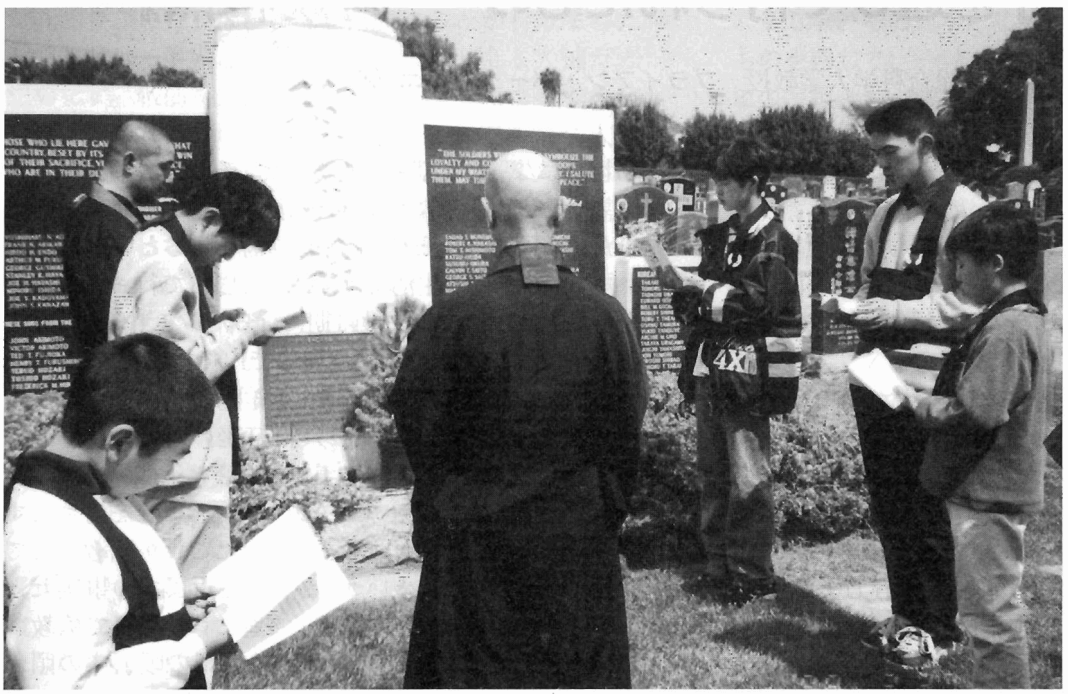
SOTO 禅 インターナショナル

発行日　1998年5月20日
発行人　松永然道　　編集責任者　福島伸悦
発行所　SOTO禅インターナショナル事務局　〒3610003 埼玉県行田市下中条1619－2
Tel.0485-57-0999　Fax.0485-57-2347　　URL:http://www.pa.airnet.ne.jp/szi
郵便振替　00100-6-611195 SOTO禅インターナショナル

Vol.12



愛知県第１宗務所主催・SZI協力　海外徒弟研修　北米ロサンゼルス・エバグリーン墓地にて

巻頭 …… 1
『21世紀の女性と仏教』
駒沢女子大学学長
東　隆眞

特集
・創立５周年記念講演録…… 2
『禅修行を通して得られたもの…
両鏡相照』
長崎総合科学大学教授
ブライアン・バークガフニ師

・海外徒弟研修レポート ……12
貞昌院副住職　亀野　哲也

海外インフォメーション…15
・北米ロサンゼルス
『山下顕光前開教総監老師葬儀』
・北米サンフランシスコ
『南原一貴師入山式』

寄稿 ……16
『この一歩からよちよちと…』
静岡県長源寺住職・海外開教師
山端　法玄

SZIだより ……18
・総会報告
・会費納入者・寄付者リスト
・シンポジウムご案内

21世紀の女性と仏教

駒沢女子大学学長　東　隆眞

今年は、西暦1998年。2000年は道元禅師ご生誕800年、2002年は750回大遠忌を迎える。私は、20世紀を道元禅師でおさめ、21世紀（もっとも、この世紀という歴史観はキリスト教のもので、仏教やイスラームには関係ないが、いまは一般社会にならって便宜的にもちいる）は道元禅師ではじめたいと思う。

さて、21世紀は、「人間の時代」とうけとめたい。過去の１世紀、人間は、科学文明を構築し、物質的繁栄をめざし、自我の拡大を追及してきた。そして、いまや、その限界に達しようとしているかのようである。国際化する現代世界、地球人として、人間とはなにか、人生はなんのためにあるのかということを問題にしないわけにはいかなくなった。いろいろなとりくみ方があろうが、その一つとして、男女とはなにか、男女という人間の生き方が、その根本から自覚されなければならないだろう。

このとき、私は、わが曹洞宗の高祖道元禅師、太祖瑩山禅師の女性観が極めて大きな意味をもってせまってくると思う。

道元禅師は、当時の仏教会の男尊女卑の弊風や女性蔑視の悪習慣を否定し、男女平等、女性尊重を説いて、仏道修行における男女の人格の平等を強調した。これはヨーロッパのルネッサンスやマルチン・ルターよりもはるか以前に唱えられた男女の人格の尊厳性を説くものとして評価されている。

瑩山禅師は、道元禅師の女性観を継承して、女性僧を養成し、女性僧の住職や後継者を指定した。

私は、アメリカ各地の禅センターで、道元禅師、瑩山禅師の女性観を講演し、予想外の大きな反響をえた。帰国後、これを成文化した。黒田武志師のご協力を支えて、安藤嘉則助教授の英訳を付し、各禅センターに配布する計画を、具体的にすすめている。

アメリカ各地の禅センターでの女性たちの活躍ぶりはめざましい。道元禅師、瑩山禅師の教えが生きている。

特　集

創立５周年記念講演録

『禅修行を通して得られたもの …両鏡相照』

長崎総合科学大学教授　ブライアン・バークガフニ 師

はじめに

（立って講演をさせていただかないとなかなか下腹に力が入らないで気合が出ませんので立って話をさせていただきたいと存じます。）

今日皆様の総会に講師としてお招きいただきまして有り難うございます。果たして皆様が今いろいろと取り組んでおられる問題に私がご参考になるような話が出来るかどうか自信が有りませんが、自分の体験、日頃考えていることからお話させていただいて、その中で一つでもご参考になることが有りましたら幸いに存じます。

話を始める前にまず私の日本語についてお断りをしないといけないと思います。日本に参りましてもう２５年、足掛け26年になります。いま、足掛け26年と言ったのですが、本当は「足かせ26年」というのが事実に近いのかもしれませんが、いつまで経ってもなかなか日本語をマスターできないでおりますので間違いがあればお許しいただきたいと思います。

私の名前も非常に難しい名前で、バークガフニが苗字で、ブライアンが名前です。僧名が「来庵」と言う風に先ほども紹介していただきましたが、私の師匠の名前が山岸善来老師で、来という字を戴いて、ブライアンから取って「来庵」、少し遠いところから自分のところに来たっていう意味も込めて名前をつけていただいたのです。

バークガフニというのが非常に発音しにくいですから、ブライアンでいつも長崎でも通しております。それでも難しいこともあるようで、時には「無頼漢」と呼ばれたり、ひどい時には「ブラウン管」と言われたことがあります。

僧名でも、京都で、臨済宗で、雲水が呼び合う時に下の字に「さん」をつけるんですけど、ちなみに私は「あんさん」といつも僧堂で言われていたんです。

僧堂の中では良かったんですが、仲間から「庵さん、あんさん」と呼ばれて、皆それ見てびっくりしていたんです。まあそういうような意味で名前にはちょっと恵まれてはおりませんが、ブライアンという風に覚えていただければいいと思います。

臨済宗に縁が有りまして、9年ほど修行させていただきましたが、実はその間、臨済宗に疑問を感じる時期も有りまして、飛び出して兵庫県の安泰寺に半年近くお世話になった時期も有りました。それは法事とかお葬式とかお寺の生活にちょっと幻滅を感じてその安泰寺でひたすら只管打坐と仕事、重労働をするという噂を聞いてこれこそ禅の生活ではないかと思って行ったのですが、いきなり大根の収穫時期に行ったんで、それこそ大変な重労働で大根を川まで運んで川で洗って、蚋に刺されて血が流れて、半年間居りましたが、今私の安泰寺と言えば、思い出すのが只管打坐の時ではなくて、大根ばかりを思い出します。

仏教が西洋に浸透していったって言うことを考えますと、かなり深い歴史があります。ただこれが仏教としては認識されていないというのがごく最近までの事実だと思います。アショカ王が派遣してヨーロッパまで仏教の教えを伝えたのが紀元前3世紀・2世紀の頃、この頃から仏教の教えというのが西洋の文化の中に溶け込んで行って、今イソップ物語にもその名残を見ることが出来ますが、イソップ物語がもともと仏教の教えを汲んだものだという意識する西洋人がまずいないだろうと思います。

グリムの童話の話、これもまたジャータカ物語から来ているものが多くて、しかしこれが完全に西洋の文化に同化して、仏教の影響を意識する人がいないと思います。

中世になって仏教の経典が少しづつ翻訳されていくという時期もあって、しかしこれが仏教にとって哲学的な興味のある人だけ、例えばショーペンハウアというドイツ人の哲学者がいましたが、非常に仏教の影響を受けながらも自分なりにそれを消化して、本もたくさん出しているのですが、ショーペンハウアが仏教の影響を受けたっていう人もほとんどいないと思います。

そういう意味で西洋が数百年も前からずっと仏教の教えに触れながらもそれが仏教として認識していなかったっていう時期がずっとあったと思います。

その後も東洋のアジアの人たちが西洋に住むようになって、これは日本で言えば明治時代位から、その時に西洋に仏教って言う仏教寺院を見受けることが出来ましたが、それはアジアの人だけが使うところで、西洋人の為の寺院ではない。ある意味で西洋の中のアジアの小さな島みたいなもので、やはり依然として油と水みたいな関係だったということが言えると思います。

西洋と東洋の本当の出会い、そして理解と言うのがそこに有ったかと言いますと、決してそうでは無いような気がします。

西洋への禅の紹介

そこで鈴木大拙という方が現れました。それまでもちょこちょこいろいろな方が西洋に行って宗教会議とか国際会議みたいなところで発表するとか有りましたが、しかし一番大きな影響を与えたのが鈴木大拙だと思います。戦前から英文でいろんな禅に関する本を発表して、それは当時アメリカを中心として非常に大きな話題を呼んだんですが、やはり第二次世界大戦が終わって初めて禅ブームと言うものが起こった。そう言っても過言ではないと思います。その時に何故禅ブームが起こったのか？それこそ皆様はアメリカとか行かれて私以上に良くご存知だと思いますが、私の見方をお話しさせていただくと、第二次世界大戦で日本人とは敵対関係でした。戦争が終わって日本人と直接にまた付き合うことが出来るようになった。そして日本の文化というものがある意味で第二次世界大戦と言う非常に大きな関心が起こったんです。それは敵国日本に対する関心だった。しかし、それが戦後になって日本の文化に対する関心となってきました。一つには神風に代表される命懸けで戦う日本人の姿というのが、それは戦時中狂信的だというレッテルを貼られたんですが、しかし実際は、その根底には大きな尊敬があったと言えると思います。自分たちの出来ないことをしている、武士の精神と言いますか、そういうものに対する尊敬というものが、関心というものが根底に在ると思います。第二次世界大戦が過ぎて、急に鈴木大拙の本が一部の学者の間だけじゃなくて非常に一般の間に読まれるようになったんです。そういういきさつがあります。その時に、丁度これも時代にこのアメリカの今までのやり方に対する、反逆心と言いますか、このままではいけないと言う、これは英語でBeat Generationと言われていますが、これも禅の本を読んで大きな影響を受けた人たちが中心となって、実際に京都の禅寺で少し坐禅をしたゲーリー・シュナイダーという詩人もいたのですが、こういう人たちが中心となって、ビートって言われる時代を切り開いたんです。これが1950年代でその中心となっていたことの一つがやはり鈴木大拙の本です。その鈴木大拙の弟子と言いますか、生徒の中でアランワッツという人がいます。このアランワッツと言うのは英国出身でもともとはプロテスタントの牧師だったんですが、非常に禅に興味をもって牧師を辞めて禅に傾倒していろんな本を書いているんですが、この鈴木大拙の本を汲み取って、非常にアメリカ人・イギリス人にわかりやすい感じで禅の精神、禅の哲学を紹介しています。これでいよいよ禅ブームの最盛期を迎えるようになりました。どうして禅に興味をもったのか。鈴木大拙のどういう処が良かったのかというと、一つはキリスト教に対する反発というものがそこにあったと思います。今までのキリスト教に盲目的に信じてきた自分の親とか周りの人を見て、これはいけないと。自分で考える、宗教はなんなのかと。そこに第三者としての神を設けないで自力で悟りを切り開いて行く、自分の力で見つけて行くと言う、そういう姿勢に非常に関心を示したと思います。

そして、そのいろんな禅の物語の中に非常に斬新なものを感じて、一寸ユーモラスな部分もあって、今までの宗教とか宗教観とは違うものをそこに感じて行ったと思います。良く言えば、そういう事です。

悪く言えば、悪くと言えばなんですが、皮肉っぽく言いますと、結局禅に対するエキゾチックなものに対する憧れっていうものが大いにありました。そしてこれは日本人にとって全くピンとこないことだと思いますが、ＺＥＮという言葉自体が、言葉としての力があるのです。Ｚという文字は、英語の言葉に殆ど現れないものです。頭文字にＺというのは、まず無い。人の名前とか、固有名詞とか。だからＺという文字はものすごく魅力的です。非常にユニークと言いますか、一つだけＺＯＲＯという漫画に出てくる人がいますが、ＺＯＲＯというのがまた魅力的な人で非常に神秘的な存在ですが、このZOROとZENという相通ずるものが有ったんです。そのZENというものは、中国語でチャンと言うんです。西洋で、日本の禅に特に興味を持ったのも、ZENという言葉に対する憧れというか、言葉の力。チャンと言うのは迫力に欠けると思います。

リンザイというのもZが出てくるのですが、リンザイとかソートーとか、その言葉の力が有った気がします。

中国語で言うと臨済はリンチーという、非常に可愛い感じの言葉で、多分同じような言葉の魅力が無かったような気がします。そして、これも無視できない存在が出てきたんです。それは何かと言いますと、ビートルズです。ビートルズが60年代にでて、丁度アランワッツが売り出された頃、ベトナム戦争に対する反発が出てきて、反戦運動が高まって、丁度その時期にビートルズが出てきて、ビートルズが一つの文化のリーダーみたいなもので、特に私たちの世代を引っ張って行く存在でした。ビートルズの音楽を見ますと、やはり段段と今までの普通のポップ音楽から深いものになって行くんですが、やはり東洋の影響を受けて、仏教の影響がその歌詞の中に出てくるんです。これを露骨に出すんです。ビートルズの場合はインドに行って、インドの師匠の下で勉強して帰ってきて、シタールと言う楽器を初めて録音音楽の中に取り入れたりして、東洋というものが露骨に出てくるのが初めてって言っていいくらい非常にポピュラーな西洋の文化の中でそうだったんです。ちなみにこの禅というのは、エキゾチックなものに対する憧れ、そしてもう一つはファッション性って言うのがあったんです。非常に斬新で、禅に興味を持つと言うことが前進的な考え方の持ち主だという、一言で言えばそういう禅に対する考え方だったと思います。

実際に私も大いにその影響を受けて東洋に出かけて、日本に来るようになって26年も「足かせ」になっている経緯となりましたが、鈴木大拙って言うのが非常に禅を西洋に紹介したって言う評価をされていますが、評価と言うのはそれを汚す、もちろんそれを汚すつもりは有りませんが、しかし、私が一つ気になることがあります。それは何かといいますと、鈴木大拙は禅は西洋人に対して不可解だと言うイメージを作り出したんです。日本人しか分からないものです、と。最近良く聞く、日本人は右脳が強いとか、左脳は西洋人だとか、そういう風に西洋人と日本人の間に線を引いて、禅と言うのは分からないという。これが逆に言えば魅力となったんです。私たちは何か分からないミステリアスなものが有る、そういうものを利用したと言ってはいけないんですが、鈴木大拙の本にものすごく深みが有りますが、西洋人に禅は不可解だというイメージを与えたと言うことが有ります。

これがその後もずっと続いて、不可解だと言う魅力がずっと禅文化のイメージとなっているんです。例えば、無門関という有名な公案集がありますが、これも英訳されています。無門関と言うのは、無門という方が書いた公案集で、公案というのは、関という代名詞みたいなものですから、無門が集めた公案集、そういう意味です。これは英訳する時にGateless gateと訳すんです。門の無い門。無門関だから、門の無い関。だけどGateと言う言葉をつかって門の無い門という全くさっぱり分からない意味です。しかし、皆これを見て、わーすごい、深い本だろうなと興味を持ってそれに飛びついてしまったという、これは誤訳です。間違った訳で、しかも禅は不可解だという間違った見方を益々強調してしまったのではないかと非常に残念に思います。

そこで、西洋人が禅に近づこうとする動機と言いますか、それが私たちが理解できない特別の何かの儀式があるだろうと。それが憧れとなってそれを知りたいということがあります。不思議の絵と言うのが有りますが、絵を見ますと、ただいっぱいガチャガチャと描いてあるだけですが、眼を遠くに焦点を合わせて見ると何か絵が浮かび上がるという絵があるんですが、それと同じように、何か見方を変えると全然別世界を体験することが出来ると言う、ある意味でLSDとかドラッグ文化と共通するところが有るんです。

色々とこの話をさせていただいたのは、背景に私が日本に来る、そして多くの外国人が禅に興味を持つ時の背景としてこういうものが有るんです。私から見れば、これを改める必要が有ると思います。この禅のファッション性、エキゾチックで東洋の神秘だとか、そういう見方では西洋人に本当に禅の理解をしてもらえないのではないかと思います。

実は私が母の病気で修行の途中に、一回カナダに帰りました。その時に母の住んでいたところの近くに、ニューヨーク州のロチェスターに、フィリップ・カプローという、安谷老師の弟子でアメリカにThree prizes of ZEN、禅の三本柱ですか、という本を出版した人を、そこに尋ねて行きました。全然電話も手紙も出さずに行って、門を叩いたんですが、門前払いをされてしまってとうとうお会いできなかったんです。カナダからわざわざ来たと言っても全然会ってくれなかったんです。その後、大菩薩禅センターというのがニューヨークにあったんですが、そこも尋ねて行きました。私のアメリカでのそういう禅の修行の姿と言うのは、その時だけ見たのですが、その時の印象を申し上げますと、ＩＢＭとか大きな企業の寄付もあって素晴らしい建物、湖の側につくって莫大な土地も買って、本当に理想境と言うところで、道場を作っていたんですが、臨済宗の関係ですが、老師が一人いらっしゃって後はほとんど100％アメリカ人でした。中に日本人の雲水さんが1人か2人くらいで、全部西洋人でした。そこで生活をしていたんですが、非常に僧堂の生活とは程遠いものでした。私から見て、大学の寮を思い出すような、クラブ活動のようなもので、そのアメリカ人と話をして一番感じたのは、今まで話したようなそういうエキゾチックなものに対する憧れ、皆何ヵ月か居たら名前がもらえたんです。そういう僧名をもらえるのが楽しみで、言い換えれば非日常的な体験をしたいと言うそういう動機が多かったんです。本当に眼を光らせて修行に打ち込んでいると言う人は私が見る限り一人も居なかったんです。そういう、今現状が有るんじゃないかと思います。これは私よりも皆様の方が良くご存知で、それこそ本当に熱心に今日来る前に色々と資料を拝見しましたが、本当に色々と一所懸命されているひとが居ると思いますが、依然として全体的に見れば禅というのは東洋の神秘で、そういう神秘に憧れを持ってやってくることが非常に多いんです。それがこの100年の間の非常に短い期間の中で、鈴木大拙とかアランワッツという大きな影響があったと思います。

私の禅の修行

私自身の経験の話をさせていただきますと、カナダの大学に居る時に禅に興味を持った、禅とか仏教とか、やはり先程お話したような、あの時期のいろいろな影響を受けながらインドに行ってみようと思ってインドまで陸路の旅で行ったんです。インドでどうしても自分が求めていたものが見つからなくて、カナダに帰るか東洋の思想の頂点にある禅の修行をするかそこで決めて日本にやってきたんです。その時に私は日本人を誰一人も知らない。曹洞宗と臨済宗の違いもよく分からない、お金もほとんど無い、ほんとに裸一つで日本にやってきたようなものでした。実は、その日本に来る途中、マレーシアで一人のフランス人の学生に会っ

て、彼が京都で留学してフランスに帰る途中、私が今度京都に行きたいと思っていて、彼から阿部正雄という大学の先生がいらっしゃる、この先生は英語も出来て禅に詳しいですからこの先生に連絡すれば良いと。その小さな一枚の紙を持って日本にやってきたんです。後で仏縁と言う言葉を覚えたんですが、これが正に仏縁としか言えないと思うのですが、安部正雄先生に連絡をして、当時は京都でＦＡＳという坐禅会をしていて、それに参加して、そして本格的に修行したいのですといったら、紹介をしていただいたんです。それが京都大学関係で妙心寺の専門道場に山岸善来和尚と言うのがいらっしゃるから紹介してあげましょう、そこで紹介して戴いて、一応弟子と言うか只の見習いとして来てもらえば良いという感じで四国の仏心寺というお寺に入門することとなったんです。その中で本当に老師と二人で生活していて、後でもう一人日本人の弟子が入って3人となりましたが、非常に学ぶことが多かったんです。その中で一つだけ紹介させていただきたいと思いますが、まだ仏心寺にきて1ヵ月か2ヵ月の時、私の父から手紙が届いたんです。それが他の郵便物と一緒にあったんですが、老師からその手紙を渡してもらって、両親からの手紙ですか？と聞かれたんです。見たら父からだったんで、はい、父からです、と答えました。そしてそれをそのまま自分の部屋に、離れと言う３畳の間の小さな所があって、そこを与えていただいていたんですが、そこへ持って行って、そこで読んで、午後の作務の時間になっていつものように茶礼をしてから庭の掃除をしなさいと言われ、掃除をしていました。別になんと言うことは無かったんですが、草取りをしていたら、老師が急に向こうから大股で、こんな感じで歩いてきたんです。見たら顔を真っ赤にして怒っているんです。何で怒っているんだろうかと立ち上がったんですが、その小柄な老師がのっぽの私の顎を狙ってボカンと拳骨を一発顔に受けたんです。もう唖然としました。何で怒られているのか分からないんです。老師が私の戸惑っている姿を見て、大きな声で手紙だ！！と言ったんです。お父さんが心を込めて手紙を書いて、切手を買って、わざわざポストまで行って投函して、そういうお父さんの心のこもった手紙を、いつも坐って、立って、オナラをかいている畳の上に置いたじゃないか！こんな薄情者は出て行け！！と言われたんです。これはまったく納得できないことでした。確かに私がそこで憤慨して、部屋に戻って考えてみますと、座布団とちゃぶ台を持っていたんですが、手紙を読んだ後に、台の上じゃなくて私の座布団の横のほうに置いていたんです。

私から見れば、どうしてそんなことを怒るのか、こんな馬鹿らしいことで、そんな事で怒るなら、出ていくもんだ！と思って、着替えて、出ようと思ったんですが、ここまでわざわざ、苦労して苦労してここまで来たんですから、ちょっとまてよと心の中で思って、箒を廊下のところから出して、庭掃除を始めたんです。

もう、全部着替えて、靴も履いてて、帰る格好になっていたんですが、庭掃除を始めたんです。そこで段々自分の不明を悟ったといいますか、手紙を畳の上においてはいけないという、これが私の一連の感覚の中に、まったく無いものでした。手紙というのは何処においても同じじゃないかと。畳の上においてはいけないというのが自分の気づかないところだったんです。裏を返せば、私が木偶坊みたいな、野原を歩いて自分の足元に一杯花とか小さな虫を潰している、そういう事にまったく気づかない、それこそ薄情者だな、というように段々反省してきて、自分の不明を悟ったんです。

段々暗くなってきて、未だ庭掃除をしていたんです。老師がいつものようにご苦労さん！といういつもの感じの声で言いました。これが仕事を終わりにして夕食の準備にしなさいという毎日の合図でしたが、いつものようにご苦労さんという風に言って、いつものように夕食をしたんですが、この時に、本当に日本の心に触れたな、というのが後で思い返せば、一番強く感じたのではないかと思います。

私にとってとても大切な教えを戴いたんですが、その次の日には老師はすっかりそのことを忘れて、顎が青くなっていたんですが、ペンを口にくわえるな、といわれて、インキと間違えて、昨日のことは昨日のこと、今日のことは今日という、まったく忘れていたんですが、私は一生忘れないんです。最近はいつも高いところに手紙を置いて、私の小柄な日本人の家内が手紙を何処に置いたの？と言うから、こんな所に置きました、と。もう一寸低いところにおいていただけないか、と言われますが。

こういう感覚。手紙に人の心がこもっていると言う、これがある意味で禅の、坐禅の中で育まれて生きた感覚じゃないかと思います。繊細な心配り、思いやり、私がそこで、禅の修行を通して非常にそれこそ忘れることのできない思い出が出来ました。

ブライアン・バークガフニ師

郷に入らば郷に従え

その後妙心寺に行かせて戴いて、本格的な臨済宗の禅の修行を始めたんです。妙心寺の専門道場の中では外国人が入るのは初めてで、その後も居ないようで、私一人だけ今のところ妙心寺専門道場で修行をしたものです。そこで、禅の修行を通して西洋と東洋の出会いと言う、正に私にとって非常に大きなテーマですが、結論から言いますと私は、来るもの拒まず去るもの追わず、という今までの禅寺のあり方そのままで良いと思います。西洋人が日本で修行したいと日本にやってくる時には郷に入っては郷に従えという。私が正にそれを座右の銘にしていて修行に打ち込んだんですが、その生活習慣の違いって言うのが日本が悪いと言うのではなくて、自分が合わせていかなければいけない。自分が修行しないと行けないという、それが出来たというか、100%はもちろん出来ないのですが、その気持ちになったのは、私が一人だったからじゃないかと思います。どうしてもこう感じるのですが、団体で禅の修行をしようとすれば、どうしてもそこに私たちと貴方達と言う、私が一人だけでしたから、多分妙心寺の僧堂で、外国人だから、ということはほとんど無かったと思う。

何処かの辺鄙な地方の、言葉も丁度日本の何処かの地方の方言と同じように私の濁った日本語が、丁度方言と同じように間違ったら他の雲水と同じように訂正されていたんです。今でも思い出しますが、私が尾底骨のところにできものが出来ました。本当はまだ新到の時で、外には出られないんですが、先輩と相談して病院に行って良いと言う事になったんです。私がいつものように僧堂を出る時にイシャ寮と言うところで一応出る許可を受けなければならなかったんですが、そこに行って印鑑を押さなければいけなかったのですが、先輩から、庵さんどうしたの？と。皆私の尾底骨のできものを分かっていると思ったんですが、庵さん、どうしたの？と。私はそこで考えたんですが、お尻にできものが出来ましたと言おうと思ったのですが、ふと、お尻と言うのは悪い言葉、汚い言葉じゃないかと思ったんです。それこそ勘違いをしていたんですが、ケツというのがより丁寧な日本語かと思ったんです。はい、ケツにできものが出来ました。と行ったら皆が笑ってその後もいつも言われたんですが、そういう風に、日本語を間違えたら、外国人だからと言うよりも、ただちゃんとした日本語が話せない人、とそういう扱いをしていただいたのですから、むしろ私が日本語を勉強することが出来たんじゃないたと思います。

そこで、もしお願いをするのなら、外国人が日本にやってきて、坐禅の修行をしたいと言った時に、その外国人として扱うのではなくて、どっかの日本の地方から来た人とみなして欲しいと思います。そういう扱いをするのが本当の国際性ではないかと思います。ひょっとしたら、今沢山の外国人が来て国際禅センターとかいろいろできて、確かに外国人が修行をする時にいろいろな問題が有ると思いますが、しかし郷に入っては郷に従え、来るものは拒まずという禅のあり方を変えて欲しくないと言うのが私の基本的な考え方です。私たち外国人が日本のやり方に合わせていて、日本の心を学び取る必要が有るのではないかと考えています。

生活習慣の違い

私が妙心寺に入ったばかりの時にこういう事が有りました。私の一夏上の先輩、私に一番近い先輩が、割と親切に色々と教えてくれていたんですが、ある意味で先輩ぶっていたというところがあったんです。むしろ一番上の高僧たちが優しかったという所も有ったんですが、隠侍というのが有って、休みの時に出かけて、私と彼が門前まで行って出たんですが、彼があっちのほうに行って私がこっちの方に行ったんです。そこで、一礼をして低頭をして別れたんですが、別れた後に目が合ったんで、こうしたんです。これは、西洋で言えば親しみを込めた、じゃあ！という一つの挨拶ですが、彼がこれを解しなかったし、僧堂に戻ってからこれについて非常に怒られてしまったんです。先輩にそんな挨拶をする雲水が有るか！ということで大変怒られてしまって、友情、親しみをこめてしたジェスチャーでしたが、やはりこれがいけなかったという、そこでこの生活習慣の違いというものを確かに強く感じたものです。生活習慣の違いというものは、これは禅に限らず異文化と異文化の出会いで必ず出てくるものです。丁度日本人がヨーロッパとか外国に行きますと、生活習慣の壁にぶつかる、それと同じ様に外国人が日本にやってくるとぶつかります。例えば、これは日本人が意識しないことだと思いますが、褒められると有り難うと喜ぶのが普通です。例えば、そのネクタイはなかなか良いネクタイですね、とカナダ人を褒めますと、喜びます。有り難うございます！私もこのネクタイ、大好きです。といいますけれども、日本人に、わー、そのネクタイなかなかいいですね、といいますと、いいえこれは安物で、大した物では有りません。殆ど100%その時に否定すると思います。自分のことだけじゃなくて身内のことも否定をすると思います。あなたのお子さん本当に頭が良いですね、と褒められれ、はい、うちの子は天才です！と言ったらその人はもう村八分になると思う、少なくとも非常識な人だなと言われるんじゃないかと思います。そこで日本に来て、日本人にお世辞といったらそれまでですが、日本人を褒めますと、困ったような感じで、いえ、そんな事はないと言われて失礼なことを言ったかな？っていう、自分が善意で言ったのに相手を困らせてしまったのではないか、何

か日本のエチケットに反することをしてしまったのではということになってしまうんです。実はこの間、長崎にグラバー園というのがありますが、この芝もすぐ近くにトムス・グラバーが東京邸を持っていたんですが、そのトムス・グラバーの曾孫が長崎にやってきて、私が通訳兼ガイドをさせていただいたんですが、ある日、グラバー園の園長さんと長崎市の人が2・3人、そしてグラバーさんご夫妻、そして私が居て、もう一人ミス長崎が英語が出来るということで同席したんです。いろいろ楽しい会話をしていたんですが、グラバーさんが丁度この話をしたんです。大阪である人の家を訪れて、家にあるものを褒めて、そして家に居る人が「いーえ、べつに」と言われて、グラバーさんも何か日本のエチケットに反することを言ったかと心配していたんです。私がそこで説明したんです。いえ、日本国憲法には法律として定まっていないんですが、かなり堅い日本の社会のルールとしてそれを否定するんです。それは謙遜で否定しているんですよ。ただ謙遜。それだけで何も嫌がっていたとかそういう意味ではないんですよ。と説明をしたら、グラバーさんが非常に納得したんですが、ミス長崎が何か怒ったような感じで、私に日本語で「昔の人はそうかもしれないけど、若い人は違うよ」美しいミス長崎から怒られて非常に悲しい思いをしましたが、5分もしない内に、グラバーさんがミス長崎に「あなたは本当に奇麗な方ですね」と言ったら、ミス長崎が「いいえー」とジェスチャーしたんですが、さすが新人類、そんなに簡単に変わらないなと思いました。

ここで私がいつも考えることを一つ申し上げますと、これは謙遜とか謙譲の美徳、奥床しさと言う日本特有の美徳だと言う風に言われると思いますが、しかし私はどうしてもそこで気になることがあります。それは上からのプレッシャーで、社会的なプレッシャーで言わないと非常識だとか、村八分にされるかもしれない。ただ周りからの弾圧で、ただ言うのならばそれは奥ゆかしさではない、口先だけで「いーや、そんなことはありませんよ、けっして」と言いながら心の中で「もっと褒めて」では、奥深いものが何も無いのではないかと思います。私の好きな言葉に、「実るほど頭を垂れる稲穂かな」というのがありますが、これこそ奥ゆかしさではないかなと思います。人生経験の上に人生経験を積んだ人が「いえ、そんなことありません」と言った時にそれこそ奥深いものがあると思います。そこで、ポイントと言うのは、自発的に言うというところです。上からのプレッシャーとか期待とか社会性を考えたとかではなくて、自分が自然に自発的にそういう事を言うというのがポイントじゃないかと思います。

禅の修行も自発的なものではないといけないと思います。親のためにとか、師匠のためにとか、社会に期待されているからするというのが本当の禅の、本来の動機ではないような気がします。しかし又逆にいいますと、専門道場に入って感じたのは、専門道場で、例えばいろんな経緯で、私みたいに外国から来た人も居て、お寺の長男で修行している人も居ましたが、専門道場の中でそういう区別というものが無くなってしまったんです。それが全部無くなってしまって同じ釜の飯を食べると言う、そういう世界が専門道場にあったと確信しています。

国際化とは…

そこで申し上げたいことの一つが、国際性と言うのは何なのかと言うことです。最近近代化とか国際性とか言った時に、近代化と言ったら幕末から明治から、ずっとその歴史があって、ヨーロッパのようになることだったと思います。ヨーロッパに追いついて追い越す、第二次世界大戦と言う挫折が有って、今度は戦後にアメリカのようになる、アメリカと同じような経済的レベルになっていくという、日本国民が一丸となってこの目的に向って今まで進めてきたんですが、そこで、国際化とか近代化とか言えば、西洋風である、西洋に近づく事だったと思うんですが、これからの時代はそうじゃなくって、足元にある本物の文化を磨くことが本当の近代化、国際化じゃないかとつくづく思います。この国際化と言うのが西洋に近づいていくのではなくって、日本を大切にする、変な意味で国粋主義とかそういう事では決してないんです。日本の素晴らしいもの、何百年も前から育まれてきたものを再確認する、良さを見直す事じゃないかと思うんですが、皆さん如何お考えでしょうか。

中近東を通る時に、イランである経験が有りました。それを紹介させていただきたいと思います。小さな食堂に入って食事をしようと思ったんですが、酷い風邪をひいていて、鼻をかみました。そしたら急に店の中がシーンと静かになって、最初は何があったのかなと周りを見たんですが、イランの人が皆振り向いて、こんな感じで私を見つめていたんです。ウエイターが、愛想の良い人だったんですが、すごい深刻な顔をして私のところに来て、まず荷物を入り口のところまで持っていって外にバーンと捨てたんです。再び私の所に来たんですが、すごい乱暴なやり方で追い出されたんですが、心臓がドキドキで殺されるかと思うくらい非常に危ないと言う感じでした。その時は何て野蛮なことをする人だと思ったんですが、後で聞きますと、野蛮なことをしたのは私でした。イランとかイラクとか、中近東の国で一番してはいけないことが鼻をかむことです。特に人が食事をしている中でそういう音を出すと言うことは失礼以上の大変なことでした。追い出されるだけですんで良かったと、むしろ人から言われたんです。

これが、ある意味で仕方の無いことです。欧米で鼻をかむと言うことはまったく問題にしないんです。皆様

は経験済みだと思いますが、例えば高級レストランでも鼻水が出たら、ハンカチーフを出して、人によっては船の汽笛みたいなすごい音を出す人もいますが、まったく遠慮もしないんです。周りの人がそれを気にするかと言えば、決して気にしない。咳をしたとかそれと同じような捉え方です。日本はイランのような極端なことはないんですが、日本でも音が出ないように遠慮されると思いますが、欧米はそれがまったく無いんで、私は欧米に生まれ育ったんですから、それが自分にとっての価値観でした。価値観の無さということも言えると思うのですが、とにかく鼻をかむと言うことはまったく問題では無いと思って、文化の壁にぶつかってしまったんです。一方では、西洋では鼻をかむと言うことは大丈夫ですが、してはいけない事も西洋なりに有るんです。

スープを飲む時に音を立ててては行けないと言う、これは小さい時から叩き込まれるものです。文字どおり叩き込まれる。スープを飲んでいてちょっとでも音がでれば、父親が自分のスプーンで自分の頭をボカンと叩いたんです。私の頭がこんなに変形してしまったのが、如何に叩かれたかと言うことを分かっていただけると思うのですが、西洋人であれば必ずこの躾、教育を受けてきているんです。食事をする時に音を立ててはいけないと言う、これが絶対に正しいと言う、これが文化です。この世の中で生まれた人が必ずこの文化のフィルターを通って大人になって行くんです。避けて通れない道だということが言えると思います。

問題はその通ってくる道が違うんです。フィルターが国によってそれぞれ違うという事です。私が日本に来てうどんを大変おいしいと思ったんですが、日本人と同じような食べ方がどうしても出来なかったんです。そういう食べ方をすれば天から大きなスプーンが飛んできて、私の頭を叩くだろうと。静かに食べるしかなかったんです。長いものを歯で切って落として、もう一回拾う、長いものは2・3回切って落としてまた拾って食べないといけない。店の方が心配してこっちのほうへ来て、「美味しくないんですか、別のものに変えてあげましょうか」とか心配していただいたんですが、「いえ、もうとても美味しく戴いています」と静かに静かに食べていたんです。最近、うどんを日本人と同じように食べられるようになったんですが、10年近くの禅の修行が必要だったというのが事実です。

実は、スプーンを振るった父親が日本に来ました。ある日軽いものを食べようという事になって、うどん屋さんに行きました。うどん屋さんに入ったら、日本人ばかりで皆うどんとか蕎麦を食べていますので、店の中がまるで滝の音みたいなすごい音で響き渡って、父親が入り口で硬直状態になってしまったんです。引っ張ってテーブルまで行って、そこで向かい合って二人で話をしていたんですが、すぐ隣のテーブルに、父が手を伸ばしたら相手の肩に触るくらいの距離で、日本人の男性がおいしそうに元気良く、一本一本に気合いを入れて、ズルズルとうどんを食べていたんです。父親はしばらくそれを無視していたんですが、もうこれ以上我慢が出来ないという感じでピクピク顔が引きつって、何回か相手をチラッ、チラッと見ていたんです。もうすごい軽蔑の眼差しです。何ていう下品な男だろうと。育ちが分かるね、と言いたい顔でした。しかし食べている最中に父が、鼻がむずむずしたようで、あの小さなうどん屋さんの中で、急にハンカチーフを出して、すごい大きな音を立ててグイーン！と鼻をかみました。と、隣の日本人の方が箸をおいて、私の父を見て「きったないオヤジだな」とすごい軽蔑の眼差しで見たんです。私がその間に立って、世界平和の難しさを痛感しました。

ある国では全く当たり前の事が、別の国に行くととんでもない非常識とか間違いとか。しかしこれが私たちの住む地球の現実じゃないかと思います。よく国際交流のパーティーとかに行きますと、人類は一つですから皆仲良くしましょう、乾杯！とやるんですが、私いつも内心とんでもないと思うんです。その理想としてはそれは結構ですが、その理想に到達するためにまず、如何に人類がバラエティーに富んでいるか、いろんな文化が有る、いろんな考え方があるという認識がなければ、一つと言う理想にはとても到達する事が出来ないんです。私が非常に仏教に感心するのは、仏教にこういう姿勢が有るように思えてならないんです。私の好きな仏教用語の一つが、外道という言葉です。外道と言う言葉が好きと言うのは一寸おかしいと言われるかもしれないのですが、キリスト教とかイスラム教では、他の宗教の事をどういう風に言うかと言いますと、日本語で言いますと邪道です。間違った道。もう絶対に天国に行けない、そんなことをやっていてはいつまで経っても駄目。だからちゃんとキリスト教になりなさい。という宣教師の基本的な信念と言いますか、姿勢がそこです。しかし、仏教には殆ど仏教の歴史に戦争が無いし、宣教師と言われるような伝道師みたいな人がいてもそういう、旗を揚げて仏教の推薦で軍隊のように他の国に行くというような事は仏教の歴史に無いんです。それは外道という考え方があるからこそじゃないかと思うんです。つまり、仏教とは違う道だけど、ちゃんと道であるという、道としてみとめているという姿勢がその言葉に有るんです。間違った道ではなくって、ただ違う道です。これが正に国際性だと思います。

両鏡相照

両鏡相照という禅語も演題に使わせていただきましたが、これも一番のポイントだと思います。つまり、画一的なもの、皆が同じようになって平和になると言うものではないんです。それが無理です。皆それぞれの

個性を保って、それを許しあって共存していく、それが先程世界平和と冗談のように申し上げたんですが、これが正に世界平和の鍵です。仏教の考え方に、そういう世界平和をもたらす姿勢があると、私は思っています。日本で、画一的なものから出ると行けないと、就職試験で宗教は何かと聞かれて、ありませんと答えないと、後で変わり者ですと。私は仏教徒ですとか、私はキリスト教徒ですとか、それが就職する時に不利になると言う事実が有るんです。だからそういう風に右へ習えと言うんですか、画一的なものを重んじると言うイメージが有るんですが、しかし私は「和」と言うのが日本の本来の姿であるのなら、「和」と言うのは皆画一的なものになるのではなくて、正に違うものがあって、それが共存して行く姿勢と言うのが日本の本当の「和」の元の意味と思えてならないんです。両鏡相照というのも、キリスト教はキリスト教でいいんです。そして仏教は仏教でいいんです。そこでお互いに許しあって尊重しあえばそれこそそこで一種の理想郷が実現するように思えてならないんです。この仏教の歴史を見ますと、仏教がインドで生まれて中国に来た時に全くインドと違う形になってきました。キリスト教は、これが違うんです。キリスト教がそのままデンと坐って、それをそれぞれの国に持ってきて、それがそのままの形でないといけないと言う事があったんです。面白い事に日本の長崎県中心に隠れキリシタンと言うのがいまして、そこでキリスト教とまったく違う形になって行ったんですが、これがキリスト教の歴史の中で非常に特記すべきものでしたが、大体はその形を変えずに、その国の人が変わらないといけないとしてきたんです。しかし、仏教がそれぞれの国のニーズと言いますか、もともとその国にあった民族宗教とかそういうものと併せながら浸透してきたんです。チベットとか中国もそれぞれの独特の仏教の形態を示しているんです。日本もまたそうです。今度、アメリカとかヨーロッパに、例えば日本が発信地となって禅とか仏教が行くと言う事であれば、それはやはり西洋の文化に合った形でなければならないと言うのが明らかじゃないかと思います。その日本の禅というものが、仏教というものが、先祖供養と非常に係わりがあるというのも明らかです。多分アメリカとかヨーロッパでお寺を建てた時も、日系の人のためのそういう日本との精神的なつながり、先祖とのつながりということがあったと思います。しかし、これが西洋人が禅とか仏教にアプローチする時には無意味な事です。西洋人には先祖供養と言う概念もないし、そういうような道から禅に入ろうともしないと思います。ですから、今度禅が西洋に本当に自然な形で溶け込むために、この日本の禅が形を変えて行かなければならないんです。西洋人がそれを自分たちのものに消化して行く必要があるのは明らかじゃないかと思います。

無駄のない禅のライフスタイル

ここで私の提案ですが、キリスト教とか仏教とか、そういう、私はこの宗教に所属していますと言う、そういう出発点ではなくて、禅と言う心と体、そして環境の健康、ライフスタイルとしての禅と言うのが西洋人のアプローチとして一番ふさわしいと考えています。先程、郷に入っては郷に従えと言ったのは、あくまで日本に来た時の事ですが、西洋に禅を伝えて行く時に禅寺の生活そのもの、その中にある生活の知恵、そしてそのライフスタイルが私は非常に素晴らしいものが有ると思います。これが西洋に伝わったらいいなと考えています。例えば、僧堂の生活の中でまったく無駄をしない。いまいろいろエコロジーと言う言葉も出て、リサイクルとかありますが、専門道場、専門僧堂ほどリサイクル率の高い生活環境はないと考えています。妙心寺に関していいますと、ほぼ100%に近いです。畑で採れるもの、それ以外にお米とか味噌とか外から購入していたんですが、ゴミがまったく生まれないんです。紙類ですとかまどで燃やしていたし、メモ帳とか創ったり障子張りに使ったり、薪も自分たちで廃材を刻んで使ってたんです。その灰は、こんどは畑に持って行って、お手洗いも全部汲み取り式で、私も半年園頭の役をさせられて、最初はなかなかこの（桶をかついだ）走り方がマスターできないでいたんですが、しかしその大きなサイクルの中で全てのものが大切で、すべてのものが活かされると言う、禅のライフスタイルと言うもの、これがこれからの環境問題に非常に適応できる事だと思います。皆様に期待するのが、そういう生活を大切にして頂きたいと言う事です。長崎県にハウステンボスと言う所が有るんですが、テーマパークですが、非常に環境に優しいと言うことを非常に目玉に使って、ゴミを出さないと言っているんですが、そのゴミを出さないと言うのが30〜40%くらいのリサイクル率、それくらいです。私、いつも専門道場と言うのは99%ですよと言って皆唖然とするんですが、しかし、しようと思えばできる事で、そして禅寺の生活と言う非常に素晴らしい前例、好例がありますので、それを大いに生かしていただきたいと思います。

私が漢字の勉強をずっとしてきて、禅語も無理矢理にさせられて、禅が不立文字の筈なのに、これくらいの厚い本を渡されて写せと言われてびっくりした事もあったんですが、しかし、公案の勉強をする時にそれが不可欠で、お蔭様でそれで日本語の勉強が出来たんですが、漢字を分析するのが一つの趣味と言いますか、最近興味を持った漢字がありまして、是非それを注目していただきたいと思いますが、理という字があります。理念とか、理想とか。この理という字は王偏に里です。これは漢和辞典を見ますと、非常に具体的な意味が有ると言う事が分かります。王偏ですが、元々は玉偏。里というのはすじ模様という意味です。つまり、翡翠とか瑪

瑙という玉の模様というのが理。それが本来の大昔の中国の意味だそうです。つまり、ありのままの姿というのが理。理に適ったやり方と言うのは何かと考えた時に、これが非常に分かり易いです。つまり、ありのままの姿に沿ってそのやり方を考えると言う。例えば、川の理と言うのは、やはりこういう（うねうねとした）形をしているんです、自然界では。これは何億何万年を経てこういう形をしているんです。しかし、文明開化の大きな波の中で、人間がより便利に、より便利に、10分15分の短縮のために、道路を作る時に今までは川に沿って造っていたんですが、今は土木技術を生かしてこういう（真っ直ぐな）道を造って、真っ直ぐ行って10分の短縮が出来たと言う風になっているんですが、これは、いわば「無理」です。無理をする。ありのままの姿を壊して、人間のエゴばかりを推し進める。私は是非西洋人、外国人が禅を学びたい時の、その理に適ったやり方を考えていただきたいと思います。器の大きさが禅、そして仏教に有るんじゃないかと思います。この環境問題を一つ取り上げても、理に適ったやり方と言うのがずっと禅の道場、禅寺の中の生活の中で実践的にしてきた事、これが大いにこれから適用できると思います。決して古いものではない。先見の目がそれこそあると確信しております。

日本の文化とは

私が日本の文化は何かと聞かれますと、一言で表現しろと言われたら、「あっさり」という言葉で表現すると思います。あっさりと言うのは、出来るだけシンプルに、出来るだけ簡素にという日本独特の思考と言うのが有るように思います。これは大いに日本で育まれてきた禅の生活では非常に大きな影響が有ると思います。つまり、無駄のない、出来るだけ簡素にシンプルにというのが日本の精神の中に、文化の中に大いに浸透していると思います。例えば白木。西洋とか中国ではすぐにペンキを塗りたがるんです。第二次世界大戦で由緒ある日本の旧家が接収されて、持ち主に戻ってきた時に大黒柱が真っ赤なペンキで塗られていてびっくりしたと言う話は聞いた事があるのですが、これは悪戯でしたんじゃないんです。未完成だから塗ってやろうと思っているんです。白木のままと言うのは未完成で、裸でなんとなく落ち着かない。しかし日本の場合はペンキとかじゃなくって白木のままで、簡素にシンプルにというのが日本独特の思考だと思います。

侘び・寂というのも、要するにそういう所に有るんじゃないかと思います。この侘び・寂というのは意味が良く分からないですが、学生に時々、比較文化論をやっている時に日本の文化は何なのか、よく侘び・寂と言う言葉が出てくるから、では侘び・寂の定義を書いて下さいと。いろんな突拍子のない返事が戻ってくるんですが、例えば、「わび」は彼女と別れた時の気持ち、「さび」は鉄が酸化して出来るものという、端的な言い方でいえば端的ですが、一つ言えるのは侘び・寂というのは、非常に簡素な、無駄のないそういうものの追求でもある。しかしもう一つ言えるのは、これが非常に落ち着いた時間の流れの中で出来るものだと思います。日本のエレベーターとカナダのエレベーターを比較しますと、違いがすぐに目に付きます。何かと言いますと、カナダのエレベーターは一つしかないんですが、日本は下に必ず二つ有るんです。カナダは開しかないんですが、日本は開と閉の二つがあります。この閉めるのは何のために有るのかと最初は不思議に思ったんです。見たら自動的に閉まるのに、何で閉める必要が有るのかと。何で閉める必要が有るのかと、日本にしばらく住んでいたら分かるんです。２秒でも３秒でも無駄にしてはいけないという約束があるから急いで行かなければならないという考え方がそこにあります。ちょっと年期の入った旧いエレベーターに乗りますと、一番メッキが消耗されているのが閉めるボタンの周りです。一回だけでも深呼吸をして、それこそ血液の循環も良くなりますし、ストレスの解消にもなります。脳波が静かになって、電力の節減まで出来るんですが、でも日本の現代の生活で２秒でも３秒でも無駄にしてはいけないっていう、急げ急げっていうのがあるんです。これは日本人がエコノミックアニマル、働き蜂ですと日本人から言われるかも知れませんが、私は納得できないんです。侘び・寂というものは日本から生まれたものであるのなら、働き蜂って言うのが日本人の本来の姿で決して無いと思います。そういう時間の使い方、ゆとりというものが、これもまた禅寺というのは厳しい厳しいと言うイメージがあるんですが、しかし、実際は例えば昼食を食べた後に二～三時間の休みを取るとか、そういうゆとりというものが非常に有るように思います。坐禅と言うものこそが、それこそ侘び・寂の精神、その将来の今からの約束とか今までの心配とかそういうものを全部脱皮して、ただひたすらに坐る、只管打坐という道元禅師の素晴らしい教えがそこに有るんじゃないかと思います。この禅の教えというものが決して旧いもので、今の生活には役に立たないものでは決して無いんです。それこそ人類がこれから存続して行くために、この禅寺の生活を見直して行く必要が有ると思えてならないんです。その簡素なものも茶の湯と言うのは、例えば茶の湯の中で、無駄の無い動きをすると言う、その心の無駄な動きも、体の無駄な動きも全て省いたと言う、ただお茶を戴くという、独特の精神状態。そして時間の過ごし方と言うものが有ると思います。俳句と言うものも世界で一番短い詩と言われています。ただ１７音節の中で全てを表現して、西洋であれば長ければ長いほど良い、非常に美しい描写と形容詞を使って。しかし日本の場合は短く短くという風にすると思います。こういう一連の文化の現われを考えますと、あっさりと簡素に、シンプルにとい

うのが日本の文化のキーワードのような感じが致します。

私が先程ファッションと言う言葉を使いましたが、西洋人にとって禅と言うのが一つのファッションで、日本志向と言うのも第二次世界大戦後それこそビートルズの時代、今も続いていると思いますが、だいぶ下火になったような気もしますが、第二次日本ブームと言うのがもう一回あったんです。それが明治中期ぐらいに、日本ブームと言うのがあったんです。これはゴッホとかそういう画家たちが非常に日本志向を受けて、ヨーロッパの絵画に大きな影響を与えているんです。今フランス料理が日本でも大変好まれていますが、フランス料理と言うのは完全に日本料理と西洋料理が合併したものです。日本志向、その第一次日本ブームの前には只中国料理と同じように大きな皿でどっとテーブルの真中において、皆でそれを食べていたんです。一つ一つ出して、大きな皿にちょっとだけ載せるとか、器の形を変えて行くとか、そういうフランス料理って言うのは全部日本からの影響です。ある意味でその時はしかし、一つのエグゾチシズムに対する憧れだったと思います。第二次のブームと言うのは、私が波に乗って日本にやって来たようなものですが、それが第二次世界大戦が終わって、禅とか日本の文化と言う、西洋に無いもの、エキゾチックなものに対する憧れ。そして例えばニューヨークですと友達に料理は何が好きですか、と言われて私が寿司が好きと言ったら、ほー、非常に頭のいい人ですね、と言う。そういう日本が好きとか、日本に興味があるというのが頭がいいと言うイメージがあって、しかしこれが一種の憧れで、非常に一過性と言いますか、一種の流行と言うのが同じじゃないかと思います。そこで、この禅をどういう風に西洋人に伝えて行くかと言う事を、私は是非あっさりと言う文化と関連してある言葉を注目していただきたいと思います。

お洒落の心こそ禅の教え

それが私は日本語の大発見として大切にしている言葉ですが、お洒落と言うのは先程盛んに使っていたファッションと言う言葉と同じ意味だとずっと思っていたんです。ファッションと言えばお洒落。お洒落と言えばファッション。翻訳する時とか通訳する時に交換すればいいという風に思っていたんです。どういう風に書くかと言うのがあまりはっきりしていなかったんです。平仮名のイメージしかなかったんですが、雑誌を見ていたら漢字で書いてあったんです。へー！こんな字で書くのか。お酒が落ちると。なんというまた東洋の神秘だと思ったんです。しかし良く見ればお酒と言う字と少し違う。棒が一つ足りない。サンズイに西です。これが読めなかったものですから、早速好奇心が刺激されて私のボロボロとなった漢和辞典を広げてみたんです。みたら、本当になるほど、なるほどと思ったんです。お洒落というのは、洒が落ちると書くんですが、洒というのは、「晒（さら）す」と言うのが訓読みで、洗うと言う意味も有るんです。つまり洒落というのは何か神秘的な、先ほどの無門関（Gateless gate）のようなものでは決して無いんです。非常に具体的な意味が有るんです。飾り気とかそういうものを全部洗い流した、素顔という、これがお洒落で、ファッションと言うのは私が類語と思っていた、同じ意味と思っていたんですが、反対の意味でした。ファッションと言うのはラテン語から来てるんですが、語源がファセレという動詞で、造るという意味です。今生活に不可欠なものとなったファクシミリも同じ語源ですが、造るんです。ファクトリーと言うのが工場。これもまた造ると言う語源から来ているんです。つまりファッションと言うのは、素材の上に飾って造っていくというのが、それがファッションです。一言で言えばカッコをつけると言うのが、それがファッションです。しかしお洒落はその反対でした。そういう人工的なもの、わざとらしさ、そういうものを前部洗い流した素顔の美しさという。なるほど、なるほどと思ったんです。喩えて言えば、作り笑いがファッションみたいなもので、お洒落と言うのは本当に面白い時に自然に出てくる笑いの事だと、なるほど、なるほどと思いました。

今日の私の最後の話として、いつまでもこのお洒落の心を大切にしていただきたいと思います。そして来るもの拒まず、そのお洒落の心を大切にしていれば、自然に無理の無い形で禅の素晴らしい教え、教えと言えば少し上からの押し付けの意味がちょっと有るんですが、教えと言うよりも素晴らしい智慧というものが世界にきっと伝わって行くと思います。皆様の益々の活躍を期待しております。ご静聴ありがとうございました。

愛知県第一宗務所主催
海外徒弟研修同行レポート

貞昌院副住職　亀野　哲也

照明の落とされた堂内を静かに止静鐘が鳴らされ、夜坐が始まりました。しきりに屋根を打ち付ける雨の音と風にそよぐ松の枝の音が心地よく耳に届いてきます。

ごくありふれた坐禅の光景のようでありますが、実はロスアンゼルスの南西約200キロの山麓に位置する禅マウンテンセンター陽光寺の法堂において、現地のメンバーと、日本からの徒弟研修会参加者が一堂に会して坐禅をしているのです。そこには異国の地であるということを忘れさせるような心地よさがありました。国の違いや人種の違いといったことを超越した一体感が堂内を包みこみ、実にすんなりと坐禅に打ち込む事ができたように思います……

今回、愛知県第一宗務所主催の海外徒弟研修に同行する機会を得たので、そのレポートをここに紹介したします。

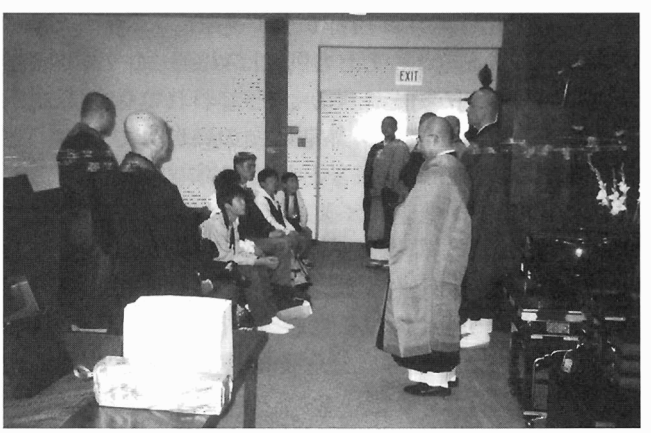
ツアー参加者のうち、徒弟としての参加は小学校1年生から高校生までの6名（男子5名・女子1名）。その殆どが初対面であったためでしょうか、集合した名古屋駅から関西空港までお互い一言も会話を交わすことなく、みな少し緊張気味でした。約10時間の航路も、あまり眠れなかったようです。

ロサンゼルスはエルニーニョ現象のもたらすあいにくの雨となり、マリナ・デルレイ、サンタモニカ、UCLA、ドジャースタジアム、チャイニーズシアターの観光は駆け足となってしまいました。道路は数箇所で冠水し、崖崩れも起こっているようで、自動車主体の交通網に多少なりとも支障をきたしていたようです。

両大本山別院禅宗寺拝登

半日市内観光の後、リトル東京に程近い禅宗寺を訪問し、開講式が行われました。秋葉玄吾北米総監をはじめ、開教センター及び禅宗寺の奥村所長、横山師、古渓師、小島師らによる挨拶を受け、自己紹介の後諸堂拝観へ。日本の寺院とだいぶ違う様子に皆とても興味を持っていたようでした。

参列者の為の長椅子が教会のように並んでいる事、本堂の正面脇に星条旗が掲げられている事、位牌堂に納められている位牌に込められている意味、納骨堂の中の様子、法堂の下に機能的につくられた坐禅堂、現地の人々が文化の拠り所とする茶室や集会場など……開教師の皆さんによる丁寧なわかりやすい説明を受ける事が出来ました。



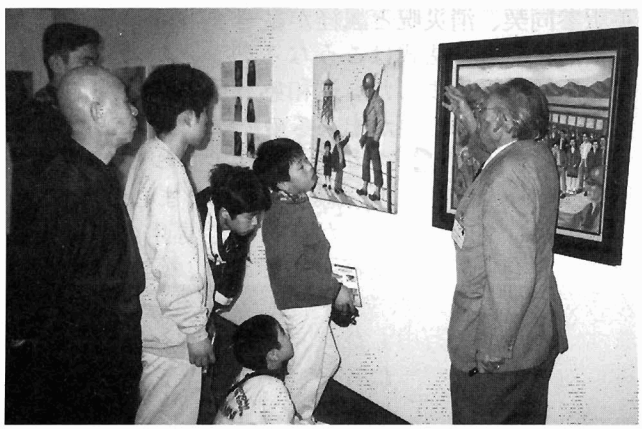
ロサンゼルス両大本山別院・禅宗寺拝登

寺院がいかに地域コミュニティーの中心に位置し、文化の発信基地となっているか、本来寺院はこのような姿でなければならないのではという思いでいっぱいでした。

その後、メンバーの方自らの手によるクッキーとドーナツのもてなしを受け、懇親の場を提供していただきました。一度ホテルにチェックインした後、再び開教師の皆さんに夕食を同席していただき、開教に係わってきた体験談や様々な質疑応答を得る機会を得ました。

初日から盛りだくさんの内容で、子供達も疲れていたようですが、ジェットラグ（時差ボケ）のためか、その晩はあまり睡眠を取る事ができなかったようです。

日系博物館・日系引退者ホーム・日系墓地見学



日系博物館

2日目の前半は、日本からの移民の心に触れる事に重点が置かれています。最初に見学した日系博物館は、西本願寺羅府別院を改修した建物で、本堂の内部が展示室としてそのまま使われています。

上を見れば見事な絵天井があり、劇場を思わせる二階席も残されています。時代を生きてきた移民の生活を継承するためのさまざまな資料が並べられていて、案内していただいた日系二世の鮫島氏からも収容所時代の貴重な体験談を伺う事が出来ました。

日系博物館　強制収容所の模型の前で

次に訪問した日系引退者ホームでは、約120人の比較的自立する事が出来る人を対象としており、一人一人に与えられた広い個室、入居金や経費の安さに驚き、あまりにも日本の老人ホームと異なることに衝撃を受けました。何よりも、200人を超えるボランティアがそれぞれ空いている時間を惜しみなく申し出て、ホームの運営に寄与しているという姿がそこに見受けられます。ボランティア活動無くして日系引退者ホームは成り立たない事でしょう。そしてここにも開教師の活動が重要な役割を果たしているのです。

祖国を離れたという日系人の想いは、その墓地に顕著に見受ける事が出来ます。墓石に刻まれた夫婦の肖像、自らの生きてきたという証をここに残したいという一つ一つの願望が一つ一つの墓石として残されています。

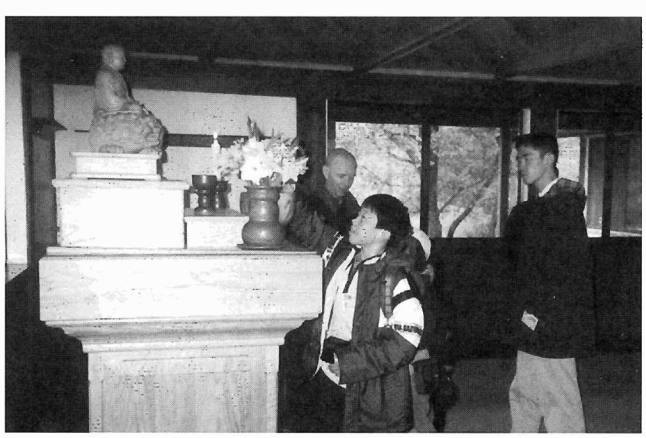
エバーグリーンの日系墓地には、一面芝生が植えられており、そこに整然と平板の墓石が並んでいる光景が見られます。中心にある戦没者慰霊塔において、午前中の研修の締めくくりとして一同による慰霊法要が営まれました。第二次世界大戦により、祖国と敵対することとなり、日本人は数年間、強制収容所へと収監されることとなりました。ロスアンゼルスの地でも、数多くの戦争による犠牲者があったのです。

松林の中の禅マウンテンセンター

午後からは次の宿泊地である禅マウンテンセンター陽光寺へと向いました。一路南西へと3時間進み、パームスプリングスから次第にシェラ山へと峠を登っていきます。途中から道路は舗装ではなくなり、数日降り続いてきた雨のため、バスは次第にスリップを繰り返すようになってきました。数キロの間はなんとか登ってきたのですが、あと500mで陽光寺到着という所でついにぬかるみにタイヤを取られ、ここからは荷物を降ろして歩く事になったのでした。途中マウンテンライオンの足跡を目にしながら……

「これって、本当にお寺？」と言うのが子供たちの第一声でした。松林の中に点在するトレーラーハウス、ロッジ風の幾つかの建物、確かに日本でのごく当たり前の物として思い抱いているお寺とは印象が随分違います。しかし、初めの感想は後で覆される事となりました。

陽光寺には日本人は居らず、もちろん日本語も通じません。ここで私たちを迎えてくださったのは5月に夫婦揃って晋山式を行うフレッチャー•天心先生と、5名のメンバー達でした。到着後法堂にて所長老師導師による拝登諷経が営まれ、その後薬石。子供たちが2名ずつに分かれてそれぞれメンバーの方々と英語を介して交流の機会を与えていただきました。



禅マウンテンセンター•陽光寺 堂内

ここ陽光寺にはアメリカだけでなくヨーロッパ各地から集い、職業も学生からコンピュータ技師、下水道設計士まで様々で、年齢も皆若い世代が多い事に驚かされます。生い立ちは様々であっても、こうして一つの所で同じ目的を持って修行しているのです。そして、日本からの将来僧侶になるであろう子供たちを心から歓迎してくれました。

夜も次第に更ける中、法堂にての夜坐に参加させていただきました。中には初めて坐禅をする子供たちもいます。それでも、止静鐘が鳴らされると、不思議なことに坐禅に没する事が出来るのです。屋根をうつ雨垂れの音も、境内を流れるせせらぎの音も、心地よい響きとなって堂内に反響しています。

アメリカ人、ヨーロッパ人、日本人、そんなことはまったくどうでも良いことだという事に気がつきます。１炷という時間が過ぎ、経行の後、天心先生による提唱を戴く事が出来ました。その要旨は次の通りです。

「今日は、日本からはるばるこの陽光寺に訪問くださり、有り難うございました。

皆様にお会いできた事をとても嬉しく思っています。私が初めて坐禅をした時は、３分程度しか耐えられませんでした。しかし、皆さんは１７時間の時差を乗り越えて、疲れているだろうけれども、坐禅をしっかり行じることが出来ました。とてもたのもしく感じます。

これから僧侶になるであろう男の子たち、そして女の子と私たちが一同に会して坐禅をする機会があったこと、これはとても素晴らしい事です。お釈迦様は恵まれた家庭に生まれ、育ちましたが、人生の上で何故人は苦しまなければならないのかと言う事に困惑し、何年もかかってやっと答えを見つけました。

この教えは弟子たちに受け継がれて次第に広められて来たのです。私たちはどんな信仰を持つ事も法律により保証されていますが、この事は当り前のように感じてしまう事があるかもしれません。しかし、苦労してこのような環境を作り上げてきた先祖に感謝しなければなりません。そして今日のような機会を得る事が出来たのです……」

天心先生の提唱は、きっと子供たちの心に深く刻み込まれた事と思います。

陽光寺は、その電気は太陽発電により賄われ、暖房は薪を使ったストーブで行われています。自然に無理な負担を与えない、そんな生活が営まれています。動かす事のできなかった岩が部屋の中に半分顔を覗かせていたり、木の幹が屋根を貫いていたり…私たちの感じる心地よさは、単に親切なもてなしというだけではなく、道元禅師の最初に創られた道場というのはこのようなものでなかったかという思いから来るのかもしれません。

真っ暗な境内は、東司や風呂へ向うにもランタン（あかり）が必要です。けれども風呂の施設はとても清潔に出来ている事にとても感銘を受けました。

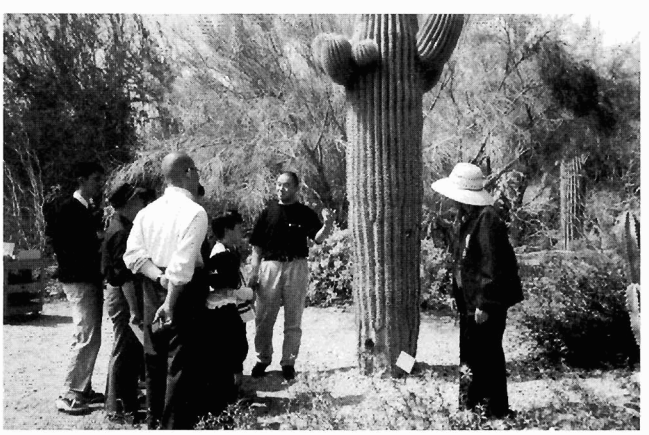
翌朝は、５時半に鐘が鳴らされ、６時から暁天坐禅を２炷行いました。あいにくの雨が降り続きましたが次第に空が明るくなるにつれて鳥の囀りも増えてきます。子供たちもすっかり坐禅に慣れてきたようでした。朝課は英語の経典が配られ、般若心経、英訳参同契、消災呪と諷経が続きます。アメリカなりに消化すると法式はこうなるのかということにとても感銘を受けました。違和感は全く感じられず、素直に受け入れる事が出来るのです。

小食は、手作りのスコーンとオレンジジュースを用意していただき、再び懇親会となりました。

その後、案内していただいた夏期専用の坐禅堂はまさに圧巻で、70人収容可能であり、建物はもちろん香炉や花器などすべて手作りである事に驚かされます。費用は40万円もかかっていないとのことで、禅に対するメンバーたちの真剣な思いを図り知ることができます。

境内に祀られている石仏に供えられている巨大な松ぼっくりもとても微笑ましい印象でした。

最後のお別れは、子供たち一人一人が自分の言葉で感想を述べ、天心先生夫妻やメンバーたち一人一人とお互い握手して別れの時を迎えたのです。



砂漠植物園

陽光寺を後として、研修の残りの日程は砂漠植物園、ディズニーランド、ユニバーサルスタジオ、そして現地のショッピングセンターでの買い物と、アメリカの文化に触れることにテーマが移りました。

研修を通して、日本人がアメリカに移り住んできた当時の苦労や、祖国の文化をどれほど大切に思ってきたのかということ、アメリカの奥深い山中で禅の教えが種撒かれ、そこでしっかりと根づいている事、後半ではアメリカの文化を感じ取り、そこから改めて日本の文化を外から見つめることができたこと……

短い期間ではありましたが、とても充実した研修ツアーだったと思います。この企画を主催していただいた愛知県第一宗務所の加藤所長老師、篠田教化主事、ＳＺＩより講師として派遣され、充実した内容を提供くださった黒柳先生、禅宗寺や開教センターの皆様、陽光寺の皆様、各訪問場所で快く迎えてくださった皆様に心より感謝申し上げます。　　合掌

海外インフォメーション

北米 ロサンゼルス

山下顕光前北米開教総監老師ご遷化

山下顕光前開教総監葬儀

ロサンゼルス禅宗寺主任開教師・前曹洞宗北米開教総監である、禅宗寺九世・開教八世・大龍寺十六世山下顕光師は、去る２月20日ロサンゼルスにおいてご遷化されました。世寿87歳。

本葬儀は、３月１日当地の曹洞宗両大本山別院禅宗寺別院葬として厳修されました。管長御専師として洞外文隆曹洞宗教化部長老師、永平寺御専師として南澤道人監院老師、総持寺御専師として江川辰三監院老師が日本より駆けつけられた。

乗炬仏事は洞外老師、奠茶仏事は東京別院副監院武田秀嗣老師、奠湯仏事は永平寺国際部部長・ＳＺＩ会長・松永然道老師、起龕仏事は曹洞宗ハワイ開教総監・町田時保老師、鎖龕仏事は駒沢大学教授・小笠原隆元老師により、厳かに執り行われた。

故山下老師のご生前中のご活躍を物語るかのように多数の供華が捧げられ、ご威徳を慕い日本・全米各地より駆けつけた宗門僧侶50人余人を始め多くの多宗派僧侶一般会葬者が焼香し、ご入寂を悼み謹んだ。また故山下老師は1938年より長年にわたり、米国における曹洞宗教団の発展とともに、日系人社会の発展にも尽力してこられた。このため、禅宗寺檀信徒以外にも、在ロサンゼルス日本国総領事をはじめとするして多数の日系人社会の方々が弔問にいらし、御老師のご冥福を祈念申し上げた。

北米 サンフランシスコ

南原一貴師桑港寺第十代主任開教師就任

去る３月８日、サンフランシスコ桑港寺において第十代主任開教師に就任した南原一貴師の入山式が盛大に執り行なわれた。

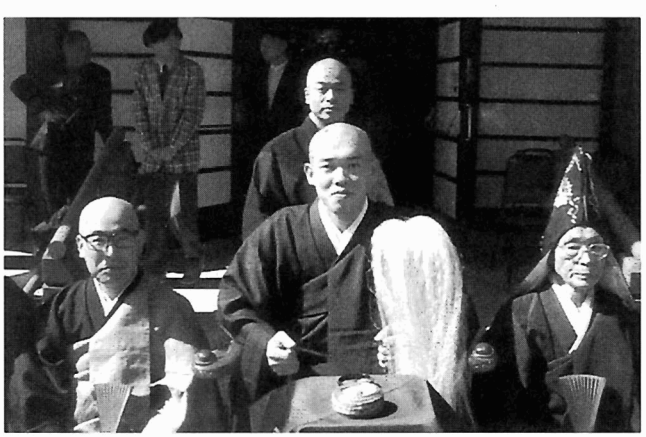
南原師は、1969年静岡県三島市医王寺に生まれた。駒沢大学仏教学部卒業後、大本山永平寺に安居。1994年、サンフランシスコ近郊に位置する好人庵禅堂落慶式随喜のため渡米。これが契機となり、翌95年６月好人庵禅堂主任開教師・曹洞宗北米総監の秋場玄吾師の補佐を行う。1997年４月桑港寺へ転任、北アメリカ開教総監部非常勤書記となる。

このような経歴を持つ南原氏の、主任開教師就任にあたっての抱負は、「みなさんが気楽に立ち寄れて、楽しく過ごせるお寺にしたい。」というものであった。この言葉どおり、入山式には若者の姿も多く見られた。そして、サンフランシスコ禅センターの白人随喜僧侶６人をはじめとする日系人以外の出席者も多かった。

桑港寺は、1934年に開創されて以来、主に日系人を宗教活動の対象にしてきた。また、日本の寺院も同様であろうが、若年層の寺院（宗教）離れも問題となっている。

南原氏の就任は、このような現状の打破になることが期待される。

（レポーター　愛知県地蔵寺副住職・浅井宣亮）



南原一貴師入山式

寄稿 この一歩からよちよちと…

静岡県長源寺住職・海外開教師　**山端　法玄**

山端法玄師プロフィール

1935年　群馬県桐生市に生まれる
1951年　16歳の時、伴鉄牛師について坐禅の実習を始める
1961年　福井県小浜市仏国寺、原田湛玄師の門に入る
1974年　静岡県長源寺に晋山
1980年　英国をはじめ、ヨーロッパ各国、オーストラリア等で坐禅指導し、現在ではオーストラリア、スペイン、ポルトガル、英国の四ヶ国を中心に摂心会を開催
著書には「On the Open Way」（英版・オーストラリア版・ポルトガル語版）
訳書には　ティク・ナット・ハン著「般若心経」「変容と癒し」
1998年　海外開教師辞令を受ける

合掌、宗教庁国際課内外の方々の、具体的なご指導と、お扶けお励ましにより、ヨーロッパへのこの旅の出発直前に、管長猊下より、洞門の海外開教師としての任辞令を拝受し、それを懐中に携えたまま、東京－ロンドン－マドリッド－グラナダ－と飛んで来ました。そして今、ここからは車で幾時間か、シェラネバダの山奥へ入り、岳々と峡谷の間を終日曲折しぬいて、ようやく慈光庵に至ります。例年のスケジュールとはいえ、少々きつい時差ぼけに加えて岳の寒さが身にこたえるのは、老化の故でしょうか。

1990年以来、未だに驢馬やミュールがポックリポックリと歩いて荷や柴を運んだりしているこの南嶽の奥の細道を、幾たび通い辿ったことでしょう、でも、この慈光庵の碧空迄登りつめてふり返れば、眼下には、2月はアーモンドの花ざかりの村々や峡谷が鳥瞰でき、又、その彼方には地中海の水平線が渺と走り、さらに（雨後や秋空の冴えわたった日には）そのはるか視界のとどく尖に、アフリカの北岸やモロッコのリーフ山脈さえ望めるので、ここで疲れが感動に一変してしまいます。こんな、信州信濃の山奥のその又奥の一軒家に、スペイン、ポルトガルからは勿ろん、スイス、オランダから、英国から、スカンジナビアの方からも有志たちが集まって、年々摂心や諸々のコースをひらいています。摂心と言っても、4～50人内外のささやかなものですが、途切れもせずに年々細々と渓流（スペイン語でバランコ）のようにつづいて来ています。境内をこの渓声が走り下って、岳麓の村々を潤しています。毎年2月いっぱいあちこちの村々山々を、かすみがつつむように満開するアーモンドの樹林も、今年は二月の終りに着いて見ると、もうほとんどは散っていました。

南スペインのこのアンダルシア地方は、アルハンブラ宮殿でよく知られるように、イスラム文化を継承するアラブの王城主が長しく支配し（アラブのこの地での最後の王城主ボーアブディルが十五世紀の終り近く（1492年）にイサベル女王一世のカトリック教徒の軍勢に降伏して城宮をあけわたす迄、実に八百年近くもの間、この回教の王侯がこのアンダルシア一帯を統治していたので）、イスラム文化の特異な香気が、とくにこの辺りの古い村々には残っていて、キリスト教文化圏には見られない殿堂、風趣がいたるところで感じられます。ここ慈光庵の山腹は、海抜千五百メートルもの高岳、背後には最高峰のムルハセンを背負って、南欧と言ってもかなりの厳冬なのですが、二月はもう眼下は見わたすかぎりアーモンド満開（さくらそっくり！）の春色です。

丁ど四年前の夏、隣村ヴァロールから出た火が、この辺一帯に燃えひろがり、風にあおられて襲って来た炎によって、慈光庵境内の樹齢五百年もの数本の栗の大木もふくめてポプラの樹々（アラミヨス）たち、桃、桜、その他の果樹の大半が焼失して、無残にも灰色の山骨と化したのですが、建物は健在で、今は又、あらゆる芳草山木の群が緑衣をまとって春を迎えています。

ここでの生活は、四時半の暁天坐から始まり、九時半の夜坐解定で終る迄、坐禅、経行、独参、粥斉坐、小生の法話と、会衆との質疑応答、ヨーガ、山作務や作業、行水、薬石夕会（今日一日の反省や明

ポルトガル・メルトラにて　中央・山端法玄師

日の予定などの話合い)、…という日課なのですが、そのカタチよりも、各々の自覚内実のしらべ確かめを主体にして、できる限り一人一人とのキメこまかい心の交流を（道心のありようと見地着眼の方向とを究め合うことを）心がけています。

今回この摂心の集約的テーマは、昨年にひきつづいて、「輪廻の主体と（心経の）空」についてのしらべ合いです。

長い肉食の習慣が身についている西洋人は、体が硬くてすぐには跌坐ができない、そこでいろいろ研究し合った末に、わたしたちは毎日ヨーガと純正精進（穀菜）食とによって数年もかけて姿勢（坐相）を根底から、内臓系から、各自調して行くことにしました。これは、坐修と相和して心身を柔軟に養いつづけて実に有効です。実験例があちこちでもう沢山あります。もとより、釈尊がすでに仙人について（苦行だけでなく）幾種ものヨーガを実習しつつ坐を貫いていられたのでしょうか。これは、何教何宗…と分かれるより以前に、ヨーガと禅定は不可分に修証され、インド全体（ひいては人類共有）の伝統叡智の結実なのではないでしょうか。日々坐禅とヨーガ呼吸体操（調身・調息・調心）とは補い合って、土台づくりから生活ぐるみ健全にして行うと、（八正道を参照しつつ）功夫し合ってやっています。

18年前の1980年に、突然英国の旧友たちに呼ばれて始まったこの年参行脚は、その後法縁に導かれるままに、エール、オランダ、イスラエル、キプロス、ノルウェー、フランス、スペイン、ポルトガル、U・S・A、ギリシャ、スリランカ、オーストラリア、ニュージーランド、インド、マデーラ、などに呼ばれては摂心やパブリックトークをして、ひとり旅がつづきました。最近では、その中から止まれぬ法縁だけにしぼって、英、スペイン、ポルトガル、オーストラリアの四ヶ国だけに滞在し、他の国々からは、この四会場へかれらの方から出かけて来てもらうことにしています。老骨にはいくら鞭打っても廻りきれないからです。

フランスで「プラムヴィレッジ」という難民をかかえた修禅村を開いているティク•ナット•ハン（THICH NHAT HANH ）禅師は、今、欧米では、ダライラマとならんで世界に法灯を点火して止まない人です。（その著、「ザ•ハート•オブ•アンダースタンディング」は、彼の般若心経講録で、三年前小生邦訳し自費出版…)。このプラムヴィレッジで、彼のフランス語、英語間の通訳をしていたフランシスなる居士は、禅師に随身する10何年か前に、英国南西デボン

ニュージーランドのお弟子さん達と

のガイアハウスで開かれた小生の摂心会にフランスから海をこえて参加した法縁を有ち、インドやヒマラヤ、ネパールなどに師を尋ねて遍参した半生のストーリーをきかせてくれました。この彼が、プラムヴィレッジでナット•ハン禅師について大、小乗を（そしてチベット仏教は他の師について）学んだ後、1991年小生の弟子「真顔」となってあらためて剃髪、ここ慈光庵では小生の不在中、日課の常修から境内地（約十町歩）の管理から村人たちとの交わりや海外からの来泊者たちの世話から法律関係や寺務から…一切を、精力的にひき受けてやりこなしてくれています。やがて老生が、もう地の裏からやっては来れなくなる来世紀に入ってからも、この彼が、国々の多くの道友たちと相和し、この山この僧伽を守り嗣いで堅実にやって行ってくれるでしょう。二年もかけて二人でじっくりと坐りながら仕上げた彼との共訳合作（英語、スペイン語）の心経は、毎暁こちらの岳々にこだましています。

この慈光庵での摂心のあと、又英国へ飛んで、こんどはウェールズで旧い道友たちと一摂心して、三月末に自坊へ帰ります。でも、すぐ又、そのあと五月三日から七月一日迄、シドニー郊外のタイ仏教センターその他の瞑想センターで摂心やパブリックトークなど予定されていて、貧乏無暇を体験しはじめています。（この五月をはじめの渡豪までには、もう二年もかかってしまったバイロンベイの新道中庵、あらたな次の小著「Open Way Zen」とが完成公刊されている筈です。）いよいよ心し心して、この一歩の大地を踏み、牛歩します。

合掌

1998•3•5　スペイン慈光庵にて…

SZIだより

総会報告

去る２月16日（月）午前11時より、1998年度「ＳＯＴＯ禅インターナショナル」の総会が東京グランドホテル３階「芙蓉」の間において開催された。

この総会に先んじて、松永然道会長の導師により、海外開教師示寂者追悼会が厳修された。つづいて副会長・藤川享胤師の開会の辞、会長挨拶が行われ議事に入った。

まず、議長選出では、事務局一任の声により、滋賀県 正伝寺住職 北野良昭師が選出され、議案が討議された。事務局より1997年度事業報告、会計報告、会計監査報告され、満場一致の拍手で承認された。引き続き、1998年度事業計画案、会計予算案が事務局から提出され、これも満場一致の拍手で承認された。

その後、参加者との意見交換では、３月下旬実施予定の人材育成を目的とした海外スタディー・ツアーに大きな期待が寄せられた。

また、「アメリカにおける女性の禅指導者を支援する会」を代表して笹川悦道師よりＳＺＩに対し募金活動のお礼と、引き続き事業協力の依頼があり、相互により一層協働し事業を展開することを確認した。

総会は11時50分、議長・北野良昭師のスムーズな議事運営により滞、りなく閉会となった。（会員の皆様には別冊にて総会資料を送付致します。）

昼食後、１時か「禅修行を通して得られたもの…両鏡相照」と題し、講師ブライアン・バークガフニ師をお迎えして講演会がおこなわれた。

講演会後は質疑応答も活発に、予定時間を大幅に超過し行われ、参加者一同有意義な時間を過ごす事が出来た。（内容は同会報参照）

総会、講演会には、宗議会を目前としたお忙しい中、議長をお務め頂いた北野良昭師、遠方より志保見道元師、海外開教審議委員でもある櫻井乗文師がご参加いただきました。また、講演会には会員以外各方面からの参加があり、海外布教に対する関心の高さをあらためて事務局が実感する行事でもありました。

事務局記

寄付者・会費納入者名簿

■「アメリカにおける女性の禅指導者を支援する会」への寄付

ご協力ありがとうございました。
愛知専門尼僧堂受付
（敬称略・順不同）
1997年11月21日～1998年3月10日

宮城県第2教区護持会御一同
源光寺　加藤瑞光　愛知県
松恵美子　塩尻市
儀宰院　小嶋公巌　岐阜県
地蔵院　平野良孝　三重県
寿清院　渋谷孝由　東京都
地蔵院　服部雄芳　三重県
薬師寺　丹羽慈光　江南市
観音寺　愛知県
景元寺　大宮市
田中寺　沖野彰方　兵庫県
徳蔵院　豊嶋萬栄　山形県
西光寺　金松霊道　上伊那郡
藤昌庵　藤田孝順　大野市
藤昌庵　藤田芳順　大野市
心月寺　寺澤妙泰　唐津市
大乗寺　板橋興宗　金沢市
笹川佳道　柏崎市
室賀宗圓　新潟市
西林寺　福井県
聖護寺　千葉慧照　熊本県
細野貞心　諏訪市
観音寺　名古屋市
省山寺　永森天昌　富山市
全久院　倉科俊勝　松本市
常宿寺　岡本光文　一宮市
浄心寺　犬飼明光　名古屋市
薬師寺　直指照心　兵庫県
濱口京子　名古屋市
小林茂子　名古屋市
上田厚子　名古屋市
大橋智鏡　安城市
地蔵院　亀井白堂　岐阜県
東光寺　富山市
藤井月光　兵庫県
三好禅芳　京都市
古川雄峰　東海市
慈済寺　山本恒準　名古屋市
布袋屋牧子　名古屋市
朝妻宗圓　三島市
箕輪千瑞　藤枝市
本田芳全　富山市
洞葉寺　中島慈応　兵庫県
洞葉寺　中島随量　兵庫県
養林庵　下山賢光　京都市
近藤延代　名古屋市
観音寺　永井智海　福井県
十王寺　松田良順　池田市
松福寺　松岡恵海　名古屋市
斉藤順芳　松坂市
観音寺　近藤格仗　名古屋市
景雲寺　菅沼慧麟　三重県
智応院　三重県
頼光寺　橋本堅豊　兵庫県
和気美香子　大阪府
目代今朝治　福岡県
目代今けい子　福岡県
耕雲庵　長野市
専行寺　三重県
觀修寺　亀山祖道　岐阜県
鈴木初恵　名古屋市
地蔵庵　北條準芳　長野市
大野芳倫　松坂市
放光庵　伊東春生　東筑摩郡
山谷　和　宮城県
心行法話会一同　宝塚市
観音寺　服部道秀　桑名郡

・SOTO禅インターナショナル受付

宗清寺　中野区
神奈川県第1宗務所第3教区
珠泉寺　神奈川県

・おことわり
青山俊董老師の墨蹟を購入する形での御協力者名、ならびにこれら支援会の事務を奉仕で務めて下さった方々の氏名は省略させていただきます。

■SZI特別寄付

（会費分を除く、敬称略・順不同）
1997年11月16日～1998年2月27日

鈴木恵美子　1万円
横井治彦　1万円
志保美道元　1万円
岡野定丸　5千円
福嶋幸隆　10万円
櫻井乗文　3万円
柴田隆全　1万円
青山俊董　3万円
瀧澤和夫　4万円
伊藤秀一　5千円
宮田春光　2万円
福島伸悦　7千円
西沢応人　7千円
北野良昭　7千円
垣内善勝　1万円

■SZI会費納入者

新規会員並びに会員ご継続ありがとうございました。
（継承略・順不同）
1997年11月16日～1998年2月27日

青山俊董　愛知県　愛知専門尼僧堂
浅井宣亮　愛知県　地蔵寺
飯島尚之　東京都　宗清寺
石田了丁　新潟県　宝台寺
板垣光照　山形県
伊藤秀一　秋田県　高岳寺
上村勇雄　東京都　保善寺
大宅弘海　佐賀県　広厳寺
岡野定丸　福島県　盛林寺
温泉寺　秋田県
片寄洋子　愛知県
川橋範子　愛知県
北浦孝雄　兵庫県　昌福寺
木村恭三　愛知県　安祥寺
木村誠治　千葉県　大洞院
月宗寺　秋田県
広教寺　山梨県
佐々木正雄秋田県
柴田弘一　秋田県　東泉寺
柴田隆全　愛知県　神蔵寺
志保美道元兵庫県　八王寺
丈山寺　京都府
乗福寺　秋田県
鈴木恵美子神奈川県
全応寺　千葉県
曹洞宗群馬県第五教区群馬県
橘徹之　新潟県　名立寺
長源寺　山梨県
東栄寺　愛媛県
廣田賢也　埼玉県　嶺雲寺
福嶋幸隆　東京都　長泉寺
福壽院　千葉県
松本好道　静岡県　興禅寺
満友寺　秋田県
宮田春光　愛知県　春江院
山崎季晟　静岡県　宗徳院
横井治彦　愛知県　龍守寺

シンポジウムのご案内

テーマ　仏法東漸「異文化圏で育つ仏法」

異文化圏へ伝え、そして学ぶ。

世界の人々の生活は相互に依存し、影響を及ぼし合う地球時代を迎えています。
このような時代の中、海外での布教活動を日本の方々にも知って頂き、
その結果として相互の布教活動が刺激され活発になり、より一層相互協力・
協働出来る環境整備に貢献できればと思い企画致しました。

日　　時　　１９９８年6月１５日　１時受付
場　　所　　愛知専門尼僧堂
会　　費　　５、０００円　（懇親会費用を含む）

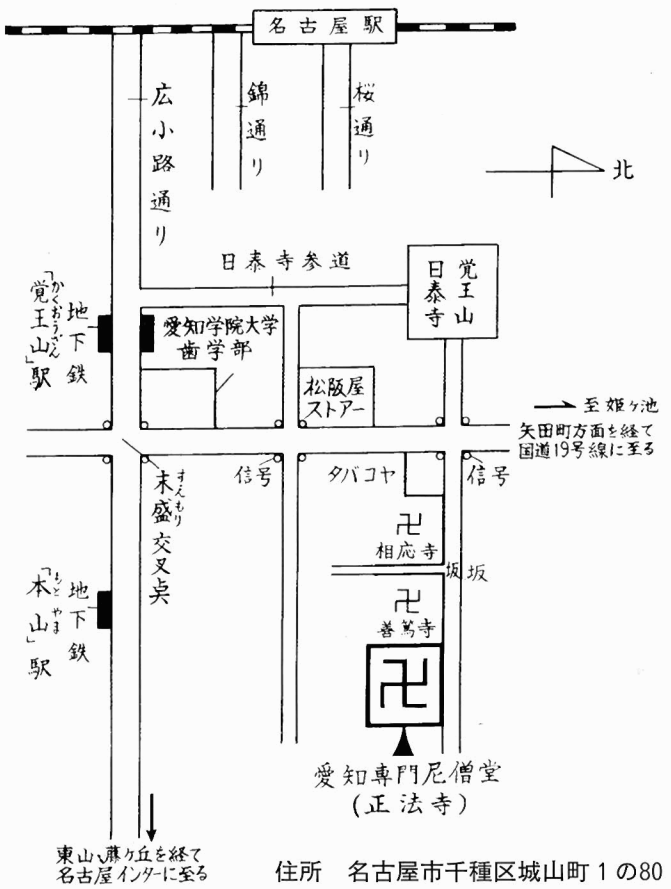
日　　程

１時	受付開始　接茶　　講堂にて
１時50分	開講式　　本堂へ移動
２時	本尊上供
２時15分	基調講演　　本堂にて
	「北米巡回布教を通して」
	講師　青山俊董老師
	愛知専門尼僧堂 堂長
３時15分	休憩
３時30分	パネルディスカッション
	パネリスト
	法岳光徳（のりたけ・こうとく）師
	＊京都府 宝泉寺住職（臨済宗）
	花園大学内 禅文化研究所研究員
	ベナージュ大円師
	＊マウント・エクィティ禅堂
	米国ペンシルバニア州
	峰岸正典師
	＊群馬県 長楽寺住職
	曹洞宗海外開教審議委員
４時30分	質疑応答
５時	懇親会　　講堂にて
７時	閉会　　解散

お申し込み方法

参加ご希望の方は同封のハガキにて６月１日までに
お申し込みください。この行事に関してのご質問等は
東京中野 宗清寺内　ＳＺＩシンポジウム事務局
☎０３－３３６１－０６１４　**飯島まで。**

特別尼僧堂／愛知専門尼僧堂



住所　名古屋市千種区城山町１の80
電話　(052)－751－２６７１

〔道順〕 タクシー　名古屋駅より東山方面に向い末盛交叉点を左折し、信号二つ目を右へ上る。右側三軒目の寺。
地下鉄　名古屋駅より東山・藤ヶ丘方面に乗車（約15分）覚王山駅で下車、徒歩10分

主　　催　　愛知専門尼僧堂
　　アメリカにおける女性の禅指導者を支援する会
企画共催　　ＳＯＴＯ禅インターナショナル（ＳＺＩ）